

シンポジウム報告

スポーツ・コーチングを哲学する（1年目）： コーチングに潜む哲学的課題¹

佐良土茂樹（日本体育大学）² 高橋浩二（長崎大学）² 小谷 究（流通経済大学）²
中山紗織（筑波大学）² 町田 樹（國學院大學）²

1. シンポジウム趣旨

1.1 スポーツ・コーチングに潜む哲学的課題 (佐良土茂樹・高橋浩二)

コーチングという実践的な営みの中には、さまざまな哲学的な問題が潜んでいる。本シンポジウムにおいて、その議論を始めるにあたり、最初に「哲学的課題」の範疇を今一度確認しておこう。というのも、この「哲学的課題」という概念自体が多義的だからである。

まず、ソクラテスが人々との対話のなかで行っていたとされる「Xとは何か」を問うことが哲学的な問い合わせだとすれば、「コーチングとは何か」、「コーチの存在意義とは何か」と問うことは哲学的な問い合わせと言えるだろう。これは本質を問うという意味で、いわゆる形而上学的な観点からの問い合わせである。さらにそこから、「測定スポーツ、採点スポーツ、判定スポーツでそれぞれコーチの役割は異なるのか」といった実践に関わる問い合わせも出てくるかもしれない。また、「自分はなぜコーチングをしているのだろう」、「自分にとってコーチングにはいかなる意味があるか」と問えば、それは自身の実存について

問うていることであり、それもまた哲学的な問い合わせができるかもしれない。さらに、日本語の「哲学」の意味を広く捉えれば、コーチングにおける倫理的な事柄について問うことも含まれると言っていいだろう。これは特に実践における善悪、正不正、美醜といったさまざまな価値に関わる問い合わせであり、こうした価値抜きにコーチングの実践を考えることはできない。スポーツのなかで活動する人はさまざまな価値を追い求めるからである。コーチの勝利至上主義も、もちろん極端ではあるが、その一つのあり方と言えるだろう。また、美醜に関しては、スポーツにおける美の探求などは「美学」として哲学と深く関係しているが、これに関連して、採点競技で評価の基準となる「芸術性」のあり方についても問い合わせができる。このようにして「哲学的な問い合わせ」は多岐にわたり、コーチングをめぐる哲学的な問い合わせも少なくないということになる。

1.2 本シンポジウムの目的と演者の紹介

以上の背景から、本シンポジウムでは、2回にわたるシンポジウムの第1回目として、それ

¹ Philosophy of Sports Coaching: some philosophical issues that behind sports coaching

² Shigeki SARODO, Nippon Sport Science University, 7-1-1 Fukasawa, Setagayaku, Tokyo, 158-8508 JAPAN
Koji TAKAHASHI, Nagasaki University, 1-14 Bunkyomachi, Nagasaki, 852-8521 JAPAN

Kiwamu KOTANI, Ryutsu Keizai University, 3-2-1 Shin-Matsudo, Matsudo-shi, Chiba, 270-8555 JAPAN

Saori NAKAYAMA, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki, 305-8577 JAPAN

Tatsuki MACHIDA, Kokugakuin University, 3-22-1 Shin-ishikawa, Aoba-ku, Yokohama, Kanagawa, 225-0003 JAPAN

ぞれ異なる立場から見えてくるコーチングの哲学的課題を明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の3点である。(1)近年、スポーツ競技団体のコーチ養成講習会などで導入されるようになってきた「コーチデベロッパー」というコーチを支える側の視点からの報告【小谷】である。そのなかでは、コーチデベロッパーの存在意義や資質能力について議論がなされる。さらに、コーチングにおいては人間力が重要な位置を占めるが、コーチデベロッパーがどのように関わることができるのであれば問題が提起される。また、(2)コーチと研究者という視点からハンドボールのジュニア育成についての報告【中山】である。そのなかでは、日本とドイツの事例の比較を通じて、ジュニア育成に関する競技会のあり方やコーチングの方向性について議論がなされる。また、「個の育成」に対する考え方について小学生の「全国大会」の観点から問題提起がなされる。さらに、(3)競技者と研究者を経験した者からの視点として、アーティスティックスポーツ(AS)のコーチングについての報告【町田】である。そのなかでは、コーチングの対象となる選手の若年化問題、芸術性コーチングの方法論不足、振付師の人材不足といった多岐にわたるさまざまな問題の内実が提示される。そのうえで、ASのコーチング問題を哲学的に考えることの必要性という切実な課題が提起される。それぞれの報告は、内容的には異なるものの、いくつかの論点、例えば、若年層のアスリート育成や競技会のあり方やコーチ育成などを共有しており、その論点に対して議論を深めていくこともできるだろう。

では、このようにしてコーチングについて哲学的に問うことにはそもそもどのような意味があるのか。この哲学的問いは、スポーツで求められる競技力の向上などに必ずしも直結するものではない。場合によっては、競技力向上、そしてそれによる勝利、というコーチングの一般

的な目標に対しては、余計なこと、脇道に見えるかもしれない。しかし、それは、スポーツの場における物事の本質や善悪を今一度問い合わせであり、コーチ自身やアスリートがより充実したスポーツ活動や実践するためや、アントラージュやステイクホルダーたちと共にスポーツの場や環境をよりよくするために避けては通れない議論である。それゆえ、このような哲学的な問いを吟味することは、一見して脇道のように見えるが、よりよい場所へつながる「大道」かもしれない。本シンポジウムでは、参加者全員とその「大道」を見つけ出し、共に歩むことを目指した。以下では、その内容について各登壇者から報告をいただいた。

(佐良土茂樹・高橋浩二)

2 コーチデベロッパーの視点から見たコーチ育成に潜む哲学的課題（小谷 究）

2.1 はじめに

2016年に日本スポーツ協会（以下、JSPO）が作成したモデル・コア・カリキュラムにおいて「コーチデベロッパー（以下、CD）」とは「コーチを育成・支援し、彼らが知識やスキルを磨いたり向上したりするのを促すトレーニングを受けた者」とされており、簡単に説明すると「コーチのコーチ」といえる。近年では、JSPOや日本バスケットボール協会（以下、JBA）がコーチ養成講習会にCDを配置している。

2.2 コーチデベロッパーの役割

講習会においてCDは受講生であるコーチの学びを支援する役割を担い、知識を提供する講師とは区別される。しかし、その役割は、必ずしも明確ではない。そのため講習会において受講生がCDに答えを求めるという事象が起っている。それでは、CDは具体的にどのような役割を担うべきだろうか。それは、その存在意義に関わる哲学的課題である。国際コーチングエ

クセレンス評議会『国際コーチデベロッパープレームワーク』には、CDの役割として(1) ファシリテーション、(2)[資格制度上でのコーチの]評価、(3) メンタリング、(4) プログラム作成とその評価、(5) リーダーシップと個人の能力開発が挙げられている。現時点の日本において、組織的にCDが指導現場まで赴いてコーチの支援をすることは行われていない。したがって、現時点の日本におけるCDの役割はファシリテーション、[資格制度上でのコーチの]評価、プログラム作成とその評価までにとどまるといえよう。講習会の現場におけるCDの主な役割はファシリテーションであり、講師のように知識の伝達を主な役割としていない。講習会では、はじめにCDと講師との役割の違いを明確にし、CDと受講生とで前提を合わせる必要がある。CDと受講生とで前提合わせができていれば、受講生がCDに答えを求めるといったことは無くなるであろう。

2.3 コーチデベロッパーの資質・能力

JSPOの講習会では、様々な競技団体のコーチが集うため、CDのコーチとしての経験が問われることは少ない。一方、JBAの受講生は華やかなコーチ経験のある者の話には耳を傾けるが、コーチ経験のないCDを相手にしないことがある。しかし、プレーヤーの能力とコーチの能力が異なるように、コーチの能力とCDの能力は異なるはずである。仮にコーチ経験がなくともCDの役割は十分に担えるのである。実際にコーチとしての輝かしい経験がなく、CDとして活躍している者は少なくない。そこで、CDの資質・能力を明確に定めたうえで、それに対する各自の理解が求められる。まず、モデル・コア・カリキュラム（以下、MCC）には「グッドコーチに求められる資質能力」が明記されている。具体的には、スポーツの意義と価値の理解や自己研鑽、コミュニケーションスキルなどである。一方、CDの資質・能力については

JBAの『コーチデベロッパーブックレット』が詳しい。『コーチデベロッパーブックレット』ではCDに求められる資質・能力として、表1のものを挙げている。

一見、CDに求められる資質・能力はコーチのものとしても捉えることができそうであるが、指導現場と講習会は異なる。例えば、コーチにもCDにも「準備力」や「段取り力」は求められるであろうが、指導現場と講習会の準備や進行は大きく異なる。したがって、コーチに求められる資質・能力とCDに求められるそれとは明確に区別され、CDにコーチとしての輝かしい経験が必要ないことも理解できる。事実、JSPOの講習会では、コーチとしての輝かしい経験を持たないCDが受講生の学びを十分にサポートできている。CDの役割と同様、CDに求められる資質・能力についてもJBAの講習会のはじめにCDと受講生とで前提を合わせる必要がある。CDと受講生とで前提合わせができていれば、JBAの講習会においても受講生がCDの話に耳を傾けないということは無くなるだろう。

2.4 「人間力」の重要性

MCCの特徴は、コーチの資質・能力を「人間力」と「知識・技能」に大別し、人間力を養うための内容がカリキュラム時間数全体の34%（63時間）を占めている点である。このように、MCCでは「知識・技能」のほかに「人間力」を重視しており、JSPO、JBAとともにコーチ養成講習会のカリキュラムに「人間力」の内容が組み込まれている。しかし、各競技の技術や戦術に関する知識のみを欲し、「人間力」の内容については全く興味関心を示さない受講生が一定数存在している。さらに、コーチ養成講習会において「人間力」に関する内容、例えば、インテグリティやコーチングの倫理に関する内容を扱ったとしても、講習会直後に受講生による不正が行われるといった事案も発生している。

表1 コーチデベロッパーに求められる資質・能力

※ JBA 公認 C 級・D 級コーチ要請講習会コーチデベロッパープックレット

理念・哲学	受講者の学びや成長を一番重要なものと考えができる「受講者中心主義」
	受講者との円滑な人間関係を築くことのできる「人柄」
	講習会をよりよいものにしようとする「情熱」
	自分自身も「コーチデベロッパー」として学び続けるという「意欲」
姿勢・態度	講習会全体の流れを視野に入れることができる「大局的視点」
	講習会で予期せぬ事態に出くわしても対処することができる「臨機応変さ」
	受講者中心的なファシリテーションを行うことができる「配慮」
	受講者個々の問題意識を汲み取ることができる「共感」
知識・スキル	講習会の準備をしっかりと行うことができる「準備力」
	受講者の構成に応じた環境を整えることができる「環境設定力」
	講習会を滞りなく進行することができる「段取り力」
	講習会の内容にかかわる「専門的知識」
	受講者にとってわかりやすい説明をすることができる「説明力」
	受講者の意見を引き出し、振り返りを促すことができる「質問力」
	受講者の意見をしっかりと理解することができる「傾聴力」
	受講者に気づきを与えることができる「フィードバック力」
	講習会の場を和ますことができる「ユーモア」

日本のスポーツ界ではスポーツ活動の場において暴力行為が存在し、暗黙裏に容認される傾向があった。しかし、2013年に入るとコーチによる暴力行使の事案が明らかになりはじめた。このような、暴力やハラスメント等あらゆる反倫理的行為を行うコーチが「知識・技能」を保有していないわけではない。各競技の戦術やスキルについて十分な知識を保有している者がほとんどである。MCCの「知識・技能」の領域として挙げられている「あらゆるコーチング現場に共通するスポーツ科学」、「個々のコーチング現場別に求められる専門知識・技能」があるコーチであっても暴力やハラスメント等あらゆる反倫理的行為を行うことは十分に考えられる。一方、MCCの「人間力」の領域として挙げられている「スポーツの意義と価値の理解」、「社会規範」、「基本的人権の尊重」、「暴力・ハラスメントの根絶」、「コミュニケーションスキル」などを保持しているコーチの指導に、反倫理的行為が入り込む余地は存在しない。したがって、コーチが暴力やハラスメント等あらゆ

る反倫理的行為を行う背景として「人間力」の欠如が考えられ、コーチには「人間力」に関する資質・能力が不可欠となる。

講習会を受講するコーチには、まずカリキュラムにおける各領域の必要性について説明し、理解を得てもらうことが求められる。コーチが講習会において「人間力」について学習する必要性を十分に理解したうえで、学びを得ることができれば、講習会直後に受講生が不正を行ってしまうといった事案も無くなることが期待される。

2.5 まとめ

JSPO や JBA でコーチ養成講習会に CD を配置して間もないため、現時点において CD 自体が認知されておらず、その役割および資質・能力についても広く知られていない。また、コーチは「人間力」に関する資質・能力が必要であることは理解してはいるものの、その資質・能力を保持することの重要性についての認識は低いと言わざるを得ない。その状態のままで、講

習会を実施してもコーチの学びが深まるとは考えにくい。そこで、講習会のはじめにCDの役割および資質・能力、コーチが「知識・技術」のみならず「人間力」に関する資質・能力を向上させることの重要性について説明し、コーチが十分に理解したうえで講習会を実施することにより、より効果的にCDがコーチを育成・支援し、彼らが知識やスキルを磨いたり向上したりするのを促すことが可能となるであろう。

（小谷 究）

3. ハンドボール競技におけるジュニア育成に潜む哲学的課題（中山紗織）

3.1 本報告の趣旨

本報告の趣旨は、筆者が研究者およびコーチとしての活動を通して出会ったハンドボール競技におけるジュニア育成に潜む哲学的な課題を示すことである。

ハンドボール競技におけるトップレベルの選手に求められることとして、相手ゴールキーパーやコートプレーヤーとの高度な駆け引きや、味方プレーヤーとの連携のなかで状況判断し、自らのプレーを瞬時に選択することが挙げられる。このようなトップレベルで活躍する選手を育成するためには、どのようなコーチング活動をすべきなのか、またどのような課題があるのかということについて筆者のこれまでの活動をもとに紹介する。

筆者はこれまでに複数の小学生チームの練習や試合を見てきたが、その内容や方針は『大人のハンドボールのミニチュア版』であることがほとんどであった。それに対して、子どもに対しては大人とは何か違うような戦術を練り、その戦術の実現へ向けて練習や試合を行う方がよいのではないかと感じつつも、アイデアを得ることはできなかった。そこで、筆者は、長年、国際ハンドボール連盟ランキング1位であり、選手育成において国際基準で高い評価を得てい

るドイツのハンドボールを学ぶために2年間（2014～16年）留学した。そのため、本報告ではドイツと日本の取り組みが中心となる。

3.2 「個の育成」に対する考え方：競技規則の観点から

競技では、長期的な選手育成を目指して国ごとや競技種目ごとにおいて様々な取り組みが行われている。特に、選手育成の初期段階である小学生年代では、コートやプレー方法などに関して成人とは異なる小学生特有の競技規則で試合が行われている。

ハンドボールにおける小学生年代の試合で導入されている競技規則は、大きく2つに分類できる。一つは、スウェーデン、フランスのように、コート、ボール、競技時間、プレー人数に関して成人とは異なる競技規則である。もう一方は、これらの変更に加えて、ドイツ、オランダ、日本、ブラジルのように防御プレー方法の義務化、または推奨をする競技規則である。これらのことから、国際競技力の異なる様々な国においては、12歳以下の試合で成人とは異なる競技規則が導入されていることを考慮すると、ハンドボールの育成年代初期では発育発達に応じて競技規則を変更することによって試合の構造を変えられること、それが長期的な選手育成に繋がるという考えを持っていることがわかる。

日本と同様に防御プレー方法の義務化、または推奨をする競技規則を導入している国々の取り組みに着目すると、オランダでは2015年から、ブラジルでは2016年から防御プレー方法が義務化され、日本では2015年から推奨されている。しかし、ドイツではそれよりも10年以上前の2003年から義務化されている。このことは、ドイツでは育成年代初期における試合や練習での独自の取り組みに関する歴史がどの国よりも古く、その理念が国内で浸透していることを示していると考えられる。具体的な競技

規則を見ると、ドイツでは、2003年からコート半面または全面でのマンツーマン防御が義務化され、日本では、2015年にオープンディフェンス（2列以上に分かれた防御隊形：自陣のゴールから遠い位置で守る積極的な防御隊形）が推奨された。

両国ともに、小学生年代では「個の育成」を目指して個人が対峙する局面を増やすために、特別な競技規則を導入し、積極的な防御隊形を採用するよう方向づけられている。成人の競技規則では、勝つ可能性を高めるためにクローズドディフェンス（自陣のゴールエリア前に1列に並んだ）のようなグループ・チーム戦術を用いる傾向にあり、それは個の育成には繋がりにくいと考えられているためである。しかし、日本では、積極的な防御隊形の採用は義務ではなく推奨であるため、多くのチームでの採用が達成されたとは言えない現状である。

3.3 「個の育成」に対する考え方：日本とドイツの事例

筆者は日独のトップチームを対象に、「個の育成」に着目してその取り組みを事例的に明らかにしている（中山・會田, 2019）。ドイツでは、タレント指導活動を中心的に行う拠点として、男女それぞれ13の都市をドイツ協会拠点（DHB-Stützpunkte）に定めている（Deutscher Handballbund, 2017, p. 91）。そこでは、ドイツハンドボール協会、指定された州協会およびその州に属するクラブチームが互いに協力しながらタレント育成活動が行われる。男女ともに拠点として定められている都市は、ライプツィヒ、シュトゥットガルト、ハノーファーの3都市である。また、ドイツハンドボール協会は、ライプツィヒ大学との提携によって指導者育成の強化を目指している（Deutscher Handballbund, 2017, p. 50）。これらのことから、筆者の留学先であるライプツィヒでは、ドイツハンドボール協会が示す理念を反映するような選手育成活

動、すなわちドイツの選手育成活動の取り組みの特徴が現れるような活動が行われていると考えられる。一方、日本には、DHB-Sのように、日本協会、各地方協会および各チームが互いに協力してハンドボールのタレント育成活動を行う拠点はない。そこで本報告では、日本については全国小学生ハンドボール大会における男子優勝チームおよび準優勝チームの2チームの取り組みを対象とした。全国小学生大会で上位の成績を残すチームは、その国における選手育成活動の取り組みの特徴を表わしていると考えられるからである。その結果、両国のトップチームにおいて「個の育成」を目指すという言葉は同じであるが、その内容や方針は異なることが推察された。具体的には、ドイツではゲーム能力を習熟させる方針でゲーム形式の練習方法が、日本ではハンドボールに必要な技術・戦術を習熟させる方針でそれらを反復することで身につけさせるようなドリル形式の練習方法が採用されていた。

相手との駆け引きを制することが最大の魅力であるハンドボールでは、育成年代においても実践的なゲーム形式の練習を取り入れることが望ましいと考えられるが、どのような「個の育成」や競技規則が日本のハンドボールの発展に寄与するのであろうか。

3.4 「個の育成」に対する考え方：全国小学生大会実施の観点から

日本におけるゴール型球技では、長期的な選手育成を目指して「個の育成」が重視されている。しかし、いまだに子どもに対する長時間練習や、発育発達段階にふさわしくないと考えられるような技術・戦術指導、すなわち勝利至上主義のもとスポーツ活動が実施されている現場も少なくない。

勝利至上主義を助長する一つの要因について、いくつかの国内スポーツ団体では、日本一を決めるチャンピオンシップ型の全国小学生大

会を挙げ、そのあり方を検討、改革している。例えば、バスケットボールでは、2017年以前は優勝チームを男女各4チーム決める形式が採用され、2018年から現在は、優勝チームを決めない形式が採用されている。柔道では、2022年度から全国小学生大会のうち個人戦が廃止された。勝利至上主義を変えるためには、指導者の意識を変えることが望ましいと考えられるが、大会システムを変えることによる効果を目指すという方針が取られたのである。この背景には、欧州諸国やブラジルでは、様々な競技種目において小学生年代の全国大会は行われていないことが挙げられる。

ハンドボールに着目すると、2022年度には第35回全国小学生大会が開催された。全国への普及を目的に開催された第1回大会からこれまでには、出場チームの試合数を確保するためには、本戦の敗退後に交流戦を開催するなど、様々な取り組みが行われてきた。しかし、日本一を決めるチャンピオンシップ型に関する改革はない。令和の時代にあった全国大会のあり方について、今後どのような方向へ進むべきであろうか。

3.5 まとめ

ハンドボールにおいては小学生年代でも実践的なゲーム形式の練習を取り入れたり、ゲーム能力を養ったりすることによって選手を育成していくことが望ましい。そして、このようなコーチング活動を実現させるためには、日本特有の競技規則への改定や大会システムの改革、「個の育成」に関する理念を明確にし、指導者育成活動を通して日本全国へ伝達していく必要性があると考えられる。

（中山紗織）

4. アーティスティックスポーツのコーチングをめぐる固有の課題：競技性

と芸術性の二兎を追うことのジレンマ (町田 樹)

4.1 アーティスティックスポーツをめぐる コーチング問題の根源

スポーツのコーチングと一口に言っても、競技によって千差万別で、それぞれが競技特性に起因する様々な課題を抱えることになるのではないかと思う。本報告では、フィギュアスケートや新体操などの音楽を伴う表現行為（芸術性）が介在する競技——すなわち、「アーティスティックスポーツ」（以下、AS）のコーチングに固有の課題を提起していきたい。なお、ASとは、報告者が拙著『アーティスティックスポーツ研究序説』（白水社、2020年）の中で提唱したスポーツ分類概念で、「評価対象となる身体運動の中に、音楽に動機づけられた表現行為が内在するスポーツ」と定義するものである。そして先に結論を示すならば、こうしたAS競技が抱えることになる固有のコーチング課題の多くは、「競技性」と「芸術性」という、ともすれば相反し合う二つの価値を、同時に追求することのジレンマから生じるものだと言えるだろう。

美学の領域において、「美しさ」には二種類あるとされる。その二種の美しさとは、「美的価値 = aesthetic」と「芸術的価値 = artistic」である。「美的価値」は、何が美しいのかという理想が明確に定義されている美しさとなる。例えば、フィギュアスケートで説明すると、「ジャンプの跳躍が高ければ高いほど良い」であるとか、「決められた通りのポジションに近いほど良い」、あるいは「スピンの回転が速く多いほど良い」などといった美しさの価値観がそれに該当する。こうした価値基準からも明らかである通り、ASの競技性にまつわる美質はほとんど「美的価値」に当てはまるものであり、良し悪しや美醜などの評価をある程度客観的に判断することができる。

対して「芸術的価値」は、芸術史との関係性やその時々の文脈によって立ち上がるものと言えるだろう。例えば、バレエ作品《白鳥の湖》をモチーフにして白鳥であるオデット姫の憂いを表現するという演技が展開された際に、バレエの原作を知っているか否かで、その演技の見え方や評価は変わるはずである。あるいは、フラメンコの舞踊様式を踏襲した演技の芸術的価値について適切に評価を下すためには、フラメンコをめぐる舞踊や音楽をはじめ、スペイン文化に関する理解が必要になるだろう。つまり「芸術的価値」をめぐっては、いかなる演技にも適用できるような一律の価値基準を定めることは極めて困難であり、その評価は評価者の芸術に関する知識や教養、経験、判断力に大きく左右されることになるのだ。

このようにASの選手が行うパフォーマンスには、「美的価値」（競技性とも言い換えられる）と「芸術的価値」の両者が求められているのである。ところがASの分野において、これら二つのバランスを保つことはそう容易ではない。なぜならば、ASはあくまでもスポーツというジャンルに属しているものだからだ。ゆえに、どうしても客観的に判断することが可能な「美的価値」の方が優先され、スポーツの評価としては馴染みづらい「芸術的価値」は周縁に追いやられていく。こうして「芸術性は大事であるが、それを追求しすぎると、競技性が犠牲になってしまい勝てない」というジレンマに陥っていく、次第に両者のバランスが競技性偏重へと崩れていってしまう——これがASに固有のコーチング問題を生じさせる主な原因であると考えられるのである。

4.2 ASのコーチングに関する三つの問題提起

では、以上に説明したような原因によって引き起こされるASのコーチング問題とは、どのようなものだろうか。ここでは山積している問題のうち、代表的なものを三つ取り上げていく

ことにしよう。

[問題提起1] コーチングの対象となる選手の若年化問題

ASの多くの競技において、競技力が最高潮に達する年齢は、14歳から20歳ごろまでとなっている。その年齢を過ぎれば、残念ながら競技力は下降の一途を辿ってしまう。なぜならば、跳躍と回転技が多くなる競技においては、慣性モーメントがパフォーマンスに強い影響を及ぼすがゆえに、身体が小柄で細身の方が有利になるとされているからだ。この傾向は、特に女性アスリートに顕著に見られる。より体重が軽ければ軽いほど、より細身であればあるほど、より容姿が美しければ美しいほど良い、といった具合に、選手やコーチが「美しい身体とはこうあるべきだ」という美的価値観に束縛され過ぎてしまうことで、「女性アスリートの三主徴問題」や「相対的エネルギー不足（RED-S）」などの健康問題が多発している。

一方で、たとえ競技力は加齢とともに減衰するにしても、芸術性を創造し表現する力は年齢と比例するように進（深）化するものである。ところが、現状では競技の構造上、芸術性に比して競技性を強化することへのインセンティブが圧倒的に高く、長期的視野で芸術性を育む指導よりも、短期的視野で競技力強化を優先させる指導の方が目立ってしまっている。こうした若年化問題をどのように捉え、いかに克服すべきだろうか――。

[問題提起2] 芸術性コーチングの方法論不足

芸術性はメートルやグラム、タイムなどの統一的な尺度では測れない。例えば、「悲哀」というテーマを表現する方法は一つではなく、自身の失恋経験に基づいて演じても良いし、既存の有名な悲劇作品を翻案するという手もある。そして、それら手段の優劣は一概には判断できない。このようにASにおいて芸術性は、競技

のアイデンティティーの一部であるにもかかわらず、非常に複雑な価値であるため、それを的確に指導するための方法論（理論）が確立されていない。芸術性とは何か、そして競技性との均衡を保つためには、どのようなコーチングが必要なのであろうか——。このことはおそらく、ASのみならず、学校体育におけるダンス教育はいかにあるべきか、という問題にも直結するような問い合わせもあるだろう。

[問題提起3] 振付師（芸術性の教育者）の人材不足

大抵のASでは、競技性を強化するコーチングと芸術性を醸成するコーチングは、それぞれ別個のものとして捉えられる。なぜならば前者はコーチの仕事で、後者は振付師と呼ばれる演技を創作する者の仕事だからだ。このようにAS界では、競技性と芸術性のコーチングが分業化していることが多い。そして実は、このうち振付師の人材が圧倒的に不足しているのである。例えば、国内のフィギュアスケート界において、コーチは数百人存在しているが、振付業だけで生計を立てられている振付師はごくわずかしかいない。これはつまり、芸術性を指導するコーチの育成方法が欠如していたり、社会的地位が低いことを意味している。振付師に対する育成環境やコーチング（コーチデベロッパー）は、いかにあるべきだろうか——。

4.3 ASのコーチング問題を哲学的に考えることの必要性

このようにASのコーチングは、競技性と芸術性の二面性を備えるがゆえの困難を多く抱えている。まさに本報告において提起した課題を解決するためには、「ASの芸術性とは何か?」、「ASの理想の演技とは何か?」、「競技性と芸術性の均衡を保ち続けるためには、どのようなルールメイキングが必要か?」、「選手が健康を害してしまうような行き過ぎた勝利至上主義に

歯止めをかけるにはどうすればよいか?」、「芸術性教育に関わる指導者的人材開発方法は何か?」等々、非常に難しい哲学的問題を考えなければならないだろう。しかし、こうした問いは選手やコーチだけで答えが出せるものではない。ゆえに、以上に示したような問題を日本体育・スポーツ哲学会に属する研究者の方々と共に考えていくことができれば、アーティスティックスポーツのコーチングもさらに発展していくのではないかと大いに期待している。

（町田 樹）

5. 1年目の総括と2年目に向けた展望

本シンポジウムでは、3名の報告の後に参加者を含めた討議が行われた。その際、各演者の報告中に双方向コミュニケーションアプリの『Mentimeter』を用いて質問やコメントを募集した。討議では、そこに寄せられたさまざま質問やコメントに対して各演者が応答していく。寄せられた質問やコメントは、図1の通りである。通常とは異なる質疑応答の方法であったが、積極的に質問やコメントを投稿していた皆様に心より謝意を表したい。

本シンポジウムの報告を締めくくるにあたり、次の点をお伝えしておきたい。つまり、コーチングにおける哲学的な課題を明らかにすることを目的にしたという事情から、必ずしもその課題に対して明確な答えが出ているわけではない、という点である。人によっては、明確な答えが出でていないことに物足りなさを感じることもあるだろう。しかし、アスリート、コーチ、コーチデベロッパー、研究者として豊富な実践経験を有する各演者だからこそ伝えることのできるコーチングに関する現状や実情があり、そこから見えてくる哲学的な問題がある。哲学的に考えていくなかでは、もちろん明晰判明な答えを出すことは大切であるが、それと同じくらい適切な問い合わせを立てることも重要だと思われる。本

シンポジウム発表者への質問やコメントははこちらから

<https://www.mentimeter.com/app/presentation/7bc206004b7658d1df8c29994bc41294/5f6799861725>



<p>小谷先生へ質問です。バスケットボールについてです。中学生時期の停滯をどう解消すべきか？中学生時期は学校の先生が指導されることが多くなり、内容も経験値だけでコーチングされていることが多い、部活時間短縮も重なっています。解決方法何がありますでしょうか？</p>	<p>小谷先生へ、戦術やスキル指導と、人間力の育成やインテグリティ教育を、同じ人が行うのをやめるのがよいのではないでしょうか？</p>	<p>小谷先生へカリキュラムと受講者ニーズは必ずしも合致する必要はないと思います。受講者のニーズに対応してしまうと受講者の考える範囲を超える学びが生まれないのでないでしょうか？</p>
<p>中山先生へのコメントです。ハンドボールにおいて、小学生年代と成人でルールや戦法が大幅に異なると、加齢に伴うルールの移行が難しいのではないか、折角個々育成してもそこでリタイアする選手が出てきてしまうのではないか、と捉えてしましました。実際そういう事例は起こるのでしょうか？</p>	<p>プレイヤーセンタードの考え方と代表の戦力強化のためにゾーンを禁止してマンツーを義務化／推奨化するのは、もし仮に子どもがゾーンを学びたいと思うのであれば、矛盾するのではないかでしょうか？</p>	<p>中山先生。感想です。子どもたちに大人と同じ規格でプレーさせるのはナンセンスですよね。ボールだけでなく、コートやゴールもなんとかしてほしいです。</p>
<p>町田先生 競技力と芸術性のジレンマについて、とは言え競技力がないと思った表現ができないというところもあると思います。そうであれば、そのバランスはどう考えられるでしょうか？</p>	<p>町田先生へ 選手の抱く芸術的価値とコーチの抱く芸術的価値は合致するものでしょうか？ その価値観の齟齬が指導上の課題になるといったことはありますでしょうか？</p>	<p>町田先生へ 競争原理や進歩史觀は、将棋や囲碁にも共通すると思うが、スポーツ界ほどに問題化されないとと思う。外的な要因が大きいのでは？</p>
<p>町田先生へ フィギュアスケートで、芸術性を磨くためにされている具体的な指導方法があれば教えてほしいです。</p>	<p>町田先生へ 質問とかでなくしてみません。私は趣味で太極拳をやっていますが、太極拳の中にも音楽に合わせて演舞し技術面芸術面で採点される種目があります。アーティスティックスポーツに該当すると思います！</p>	<p>町田先生 私はバトントワリングのコーチや審査員をしています。2週間前に世界選手権大会審査して来ただけです。芸術性の審査難しいです。バトントワリングでは、音楽性を重視していますが、それよりも多様性があるべきで、最後には「賞」で判断しています。先生は、質をどう捉えていらっしゃいますか？</p>
<p>町田先生へ 芸術的価値について国家間や文化圏間の相違は存在しますか？ さらに審判同士や、審判と選手や指導者との間での芸術的価値の相違が問題になることがありますでしょうか？</p>	<p>三人の先生方へ。少し倫理的な話をコーチングをしていて、・その種目に特化した子供の選択肢を狭めていると思われるることはありますか？（子供の自律性の問題）・もしコーチング上、「やめる」と言われたらどのように対処されますか？</p>	<p>考えてみれば教師になるにはそれなりの教育を受けて資格を取得しなくてはならないのに、スポーツのコーチは技術さえ教えられれば、競技の経験があれば、子どもの人格育成に大きな影響を及ぼす指導者になれるというのはけっこう恐ろしいことだと思います。</p>

図1 Mentimeter を用いて得られた質問やコメント（筆者らが編集）

シンポジウムの報告が、今後の日本体育・スポーツ哲学会におけるコーチングに関する哲学的探求の一助となれば幸いである。さらに、シンポジウムの2年目においては、そうしたさまざまな問題提起や課題発見を引き受けつつ、さらなる議論が展開されるよう取り組んでいきたいと考えている。特に、競技スポーツにおけるコー

チングと教育としてのスポーツにおけるコーチングとの接点、集団スポーツにおけるコーチングと個人スポーツにおけるコーチングとの相違、スポーツ・コーチングと武道における師弟関係が挙げられる。

（佐良土茂樹・高橋浩二）

受付 2023年3月31日